

2015年10月25日川越教会

なぜ生きるのか

【聖書】エレミヤ書20章7～10節

主よ、あなたがわたしを惑わし／わたしは惑わされて／あなたに捕らえられました。あなたの勝ちです。わたしは一日中、笑い者にされ／人が皆、わたしを嘲ります。わたしが語ろうとすれば、それは嘆きとなり／「不法だ、暴力だ」と叫ばずにはられません。主の言葉のゆえに、わたしは一日中／恥とそしりを受けねばなりません。主の名を口にすまい／もうその名によって語るまい、と思っても／主の言葉は、わたしの心の中／骨の中に閉じ込められて／火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして／わたしは疲れ果てました。わたしの負けです。わたしには聞こえています／多くの人の非難が。「恐怖が四方から迫る」と彼らは言う。「共に彼を弾劾しよう」と。わたしの味方だった者も皆／わたしがつまづくのを待ち構えている。「彼は惑わされて／我々は勝つことができる。彼に復讐してやろう」と。

[序]エレミヤの嘆き

私たちは今月から来月にかけて二ヶ月間、旧約聖書のエレミヤ書を学んでいます。預言者エレミヤは自分から進んで預言者になったのではありません。平穏な田舎で育ち、内気で繊細な神経の持ち主でした。ところが神は、「わたしは平凡な若者に過ぎません」としり込みする彼を、強いて預言者にお召しになったのです。

しかも神は、彼を結婚させませんでした。酒を酌み交わしながら楽しむ友達付き合いもさせませんでした。近隣との大切な付き合いの機会である葬式の出席も禁じました。そして唯ひたすらに、イスラエルが滅びるといふ厳しい神の裁きを語り続ける預言者の生涯を送らせになったのです。

「子どもは褒めながら育てよ」と言われています。私たち人間は「そんなことを言っただけ、そんなことをしては駄目だ」と言われ続けると、自信を失い、いじけて、役に立たない無気力な人間になってしまうからです。しかし神はエレミヤに、人が聞くのを嫌がる神の厳しい裁きと、国が滅びるといふ預言を語らせ続けたのです。

彼は国の指導者たちばかりでなく、一般民衆や地元の人々や親類縁者からも非難され続けました。その上慰めとなる妻や子どもという家族を持ちません。酒を酌み交わして語り合う友達付き合いも禁じられています。こうして社会から受け入れられず、嫌われ、迫害される孤独な生涯を送らされたのでした。

[1]エレミヤの苦しみ

エレミヤはたまたまなくなって、神に訴えています。今日の7節以下をご覧ください。「主よ、あなたがわたしを惑わし、わたしは惑わされて、あなたに捕らえられました。あなたの勝ちです。わたしは一日中、笑い者にされ、人が皆、わたしを嘲ります」。「わたしが語ろうとすれば、それは嘆きとなり、不法だ、暴力だと叫ばずにはられません。主の言葉のゆえに、わたしは一日中、恥とそしりを受

けねばなりません」。

「主の名を口にすまい、もうその名によって語るまい、と思っても、主の言葉は、わたしの心の中、骨の中に閉じ込められて、火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして、わたしは疲れ果てました。わたしの負けです。わたしには聞こえています、**多くの人の非難が**」。

神はどうして、それほどまでして、皆が嫌がる言葉をエレミヤに語らせ続けたのでしょうか。また私たちはこのエレミヤの叫びから、何を学ばなければならないのでしょうか？

エレミヤはこのように嫌われ者の預言者活動を約 50 年続けたようです。私も神学校を卒業してから、目白ヶ丘教会の副牧師をスタートに、牧師生活を 53 年半続けさせていただいています。今あらためて振り返りますと、自分なりに大きな衝撃を受けた深刻な経験が心に浮かんできますが、エレミヤほどに叫んで神に訴えたことはありませんでした。

なにしろ彼は、今日の箇所が続いて、こう叫んでいます。「呪われよ、わたしの生まれた日は」「なぜわたしは母の胎から出て、労苦と歎きに遭い、**生涯を恥の中に終わらねばならないのか**」。こんなに辛い人生を送る位なら、生まれてこなかった方がよかったというのです。エレミヤに比べますと、私はなんとという平穏無事な牧師人生を送って来れたのでしょうか。何か申し訳なくなります。

しかしそれでも毎年 10 月 28 日になりますと、札幌時代の 1988 年に経験した、教会員が教会員を殺してしまうという**事件の記憶**が甦ってきます。この厳しい経験を、恩師熊野先生流にもう一度お話させていただきます。

[2]恐ろしい事件

それは 27 才の教会員 S さんが、病弱な 24 才の R さんのアパートで相談相手になっていた時に、睡眠薬の入った紅茶を飲まされて、**ガス中毒死**させられた事件です。R さんは姿を消しました。翌日、病弱な娘を心配してアパートを訪れた彼女の母親が**遺体**を発見し、警察に届け出て R さんの自殺と認定され、父親がお寺で葬儀を行いました。

一方 S さんの親は、行方不明になった S さんを探しているうちに、R さんのアパートの入り口に S さんの傘と靴を発見、室内を探すと S さんが身に着けていたものがあり、警察に通告。指紋や血液型から遺体が S さんだったことが分かったのです。そして更に睡眠薬を使った手口から、2 年前にススキ野のラブホテルで発生した殺人事件の犯人ではと捜査が行われ、R さんは沖縄まで逃げた後に逮捕されたのです。私たちも S さんの母と共に R さんの両親の家で葬儀の前に**遺体**を拝見してお祈りしています。遺体は赤く腫れあがり、普段の R さんとは違っていました、それが S さんだとは夢にも思いませんでした。

病弱で入退院を繰り返す R さんは、親身になって相談相手になってくれる S さんに、**入院費用を**

稼ぐために時々すすき野で売春をしていたことを漏らしたのでしょう。Sさんは聖書に記されているダビデ王とバテシェバの不倫を引き合いにして、**忠告の手紙**を書いたようです。そこでRさんは殺人事件の前科がバレることを恐れて、**口封じ**に殺してしまったのです。

逮捕されたRさんは、医師の精神鑑定の結果**境界人格障害**と診断されました。「どうして殺す気持ちになったのか、自分でも分からない」と答えるからです。客にとつた男を眠らせて刺し殺したり、相談相手になってくれる大切な親友をガス中毒死させるなど、全く**異常**です。でもその異常行動が**突然発生**するのです。**統合失調症**に未だなり切っていない境目の状態なので、本人は病状への自覚が薄く、医師の指示に従って治療を受けません。従って病気を見抜くことは素人には難しいでしょうと専門医に言われました。彼女は裁判で**無期懲役**の判決が下り、上告しましたが認められず確定、現在でも**服役中**です。

彼女はH女子高に入学後、礼拝に出席するようになり、卒業後2年ほど途絶えましたが、**病弱な体**になり、再び出席し始めました。**青年クラス**がしっかりと迎え入れ、病院に見舞い、慰め励まし支えたので、1年半後の1986年9月に他の青年2名と一緒に**バプテスマ**を受けて、教会員になりました。1987年2月に結婚しましたが、12月に離婚、再び入退院を繰り返すようになりました。

札幌教会は**求道者**を教会学校の**各クラス**が、**教会員**を**牧会執事**10人が分担してお世話をする体制をとっていました。Rさんは先ず青年たちがお世話をしていましたが、結婚後は執事さんと婦人会が担当し、Sさんは青年時代に引続き、**若い婦人会仲間**として、執事さんと連絡をとりながら見舞いを続けていました。

10月17日にSさんより「Rさんが大きな聖書を買って、牧師先生から**聖書を学びたい**と言っています」と電話がありました。私は丁度他の用で身動きが出来ない状況だったので、執事さんに連絡して、二回訪問をしていただきました。そしてやっと自分で訪問しようと思っていた矢先に、事件が発生してしまったのです。恐らくこの時期に、Rさんが自分の**裏の生活**をSさんに漏らし、手紙で忠告されるといやり取りがあったのではないのでしょうか。

とにかく札幌教会は教会員と求道者が300人を超える大所帯でした。皆が兄弟姉妹として声をかけ合って、一緒に礼拝を守り、聖書を学び合い、助け合って信仰の交わりを拓けていこうとしていました。Sさんもその活動を積極的に担って下さいました。もし彼女が**真実を尽くして**関らなければ、このような目に遭わずにすんだでしょう。或る方々は**殉教の死**だと言いましたが、本当にそうです。でもこのような悲劇を起こさぬように、牧師としてもっとよく注意を払うべきでした。手ばかりをしてきた**責任を痛感**させられました。

その第一として、このような事件を起こし得るとい**人間理解**に欠けていました。心身の病んでいる状態について注意と心得を専門家から**学習**する機会を持つべきでした。そして群れが大きくなればなるほど、どのように支え合えば良いかを、折りにふれて**学び合う**べきでした。

第二に、教会の純潔と秩序を維持するために**教会員を整える**と言う面でも、手抜きだったのです。二人も人を殺した罪を犯した人は除名すべきではないかとの声が上がりに、**教会規則**を適用しようとしたが、規則そのものが全く不備で役に立たないことが分かったのです。

第三に、理不尽に大切な家族を失った**ご遺族の深い悲しみ**を慰め支えるという、牧師としての最も大事な役割についても、当時の資料を読み返す度に、もっと適切な言葉や行動をとっていたら、もう少し悲しみを和らげて差し上げられたのではないかと、申し訳ない思いに駆られます。本当に未熟でした。

それにもかかわらず、この私はエレミヤのように、「人は皆わたしを**嘲**ります」「わたしには聞こえます。多くの人の**批難**を」と神に訴えることもなく、今日まで過ごしてきました。何と恵まれた牧師生活を送らせていただけたことでしょうか。主の憐れみに、只々感謝です。

[結]人生最上のわざ

今日のエレミヤの告白が生まれる**背景**が20章の1節からに記されています。彼はエルサレムの神殿の庭で神の裁きを語り、**神殿の最高監督者**パシェフルに逮捕され、打たれて、ベニヤミンの門に**足かせ**で一晩つなぎとめられました。しかし翌日、足かせを解かれると、エレミヤは再び彼に語りました。

「主はこう言われる。見よ、わたしは**お前を恐怖に引き渡す**。わたしはユダの人をことごとく、バビロンの王の手に渡す。彼は彼らを**捕囚**としてバビロンに連れ去り、また剣にかけて**殺す**」。「パシェフルよ、お前は一族の者と共に、**捕えられて行き**、バビロンに行って死に、そこに葬られる」。南ユダ王国の**滅亡の危機**が刻々と迫って来ているのです。

20章に続く21章1節をご覧ください。ここにもパシェフルの名が出てきますが、20章のパシェフルとは父親の名が違いますから、同名異人です。国王がゼデキヤですから、**第一次バビロン捕囚**となったヨヤキン王に代わって王になった人です。ですから20章のパシェフルはヨヤキン王と共にバビロンに連れ去られてしまったのです。このように、エレミヤが語る国家滅亡の現実が身近に迫っているにも関わらず、神殿の最高監督者ともあろう人物が、神の言葉に耳を貸さず、とんでもない戯言を語って**人心をかく乱**すると、エレミヤを逮捕しているのです。

私たち人間は、**神の怒り**とか**厳しい裁き**を聞きたくないのですね。滅びに向かっていると言う**警告**に耳を傾けず、生き方を変えようとはしないのですね。矢張り褒められ、褒められして育ってきたからでしょうか。しかし自分の罪深さを示され、**悔い改めて**、神の求める正しい道を歩み続け、神の祝福に預かろうとする**信仰**をこそ、何よりも大切にしたいものです。

辛い出来事に次々と見舞われ、楽しい思いを味わえないと、「どうしてこんな人生を与えられたの

か。生まれて来なければよかった」と歎きたくなるに違いありません。また私たち老人は、日増しに出来ないことが、一つ、また一つと増えていくにつれて、情けなくなってきた、生きていく意義が薄れていきます。人に負担をかけながら生きていく申し訳なさが募り、「お召してください」との思いが増していくのではないのでしょうか。

SさんはRさんを愛して命を失いました。Rさんがその愛を受け取らずに、自分の生き残りを計りました。Sさんは受けとめてもらえずに、かけがいのない命を捨てたこととなります。でも主イエスは「わたしは羊のために命を捨てる」(ヨハネ 10:15)とおっしゃいました。Sさんは主イエスが愛したようにRさんを愛したのです。そして主イエスから「わが友よ」と迎えられたのです。

葬儀の後でお父さんが私におっしゃいました。「娘はRさんの十字架を引き受けて担ったのですよね」。友の十字架を引き受けた愛、それこそまさに「わたしがあなたがたを愛したように」ですね。Sさんは、主イエスのお言葉に生きました。ですから喜びに満ちて主イエスと共に生きておられるのです。

うめき続けながらも主の言葉を語り続けて離れなかったエレミヤも、主と共に生きていることでしょう。「なぜ生きるのか」。主なる神と共に永遠の祝福にあずかる人生をこそ、送りたいものです。

今日のエレミヤの嘆きに代わって、ホイスヴェルスの「人生の秋」に記されている詩を読み上げて、終わりにいたします。

最上のわざ

この世の最上のわざは何？ 楽しい心で歳をとり
働きたいけれども休み シャベりたいけれども黙り
失望しそうなときに希望し 従順に平静におのれの十字架をになう――

若者が元気いっぱい神の道を歩むのを見てもねたまず
人のために働くよりも 謙虚に人の世話になり
弱ってもはや人のために役たたずとも 親切で柔和であること――

老いの重荷は神のたまもの 古びた心にこれで最後の磨きをかける
まことのふるさとに行くために
己をこの世につなぐ鎖を 少しずつはずしていくのはつらい仕事
こうして何も出来なくなれば それを謙遜に承諾するのだ

神は最後に一番良い仕事を残して下さる それは祈りだ――
手は何も出来ないけれども 最後まで合掌ができる
愛するすべての人の上に 神の恵みを求めるために

全てをなし終えたら 臨終の床に神の声を聞くだらう
『来よ わが友よ われ汝を見捨てじ』と――

祈ります:神さま、あなたは私たちが、あなたの御心を第一にして、常に祈り、御心に聞き従って、命の道を歩み続けることを求めておられます。しかしあなたがエレミヤに語らせた言葉を、人々は聞こうとしませんでした。エレミヤの孤独な生涯に、私たちの罪深さと、あなたの深い悲しみを見出します。甘い言葉に魅かれる心を捨てさせてください。どんな時にも、私たちを救おうとしておられるあなたが、共にいて下さることを信じて、あなたに聞き従わせてください。救い主イエス・キリストの御名前によって祈ります。 アーメン